
呼吸

すとむみずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼吸

【Nコード】

N8591Q

【作者名】

すとむみずみ

【あらすじ】

ナオキと静のドキドキウィンターラブストーリー！！
[改訂版]

(前書き)

調子に乗って2作目です。
拙い文章ですがよろしく願います。
感想お待ちしております。

もう冬も終わりだというのに、相変わらず外の空気は冷えていた。学校へ行く途中、ナオキは少女に声を掛けられた。

「キクチくん、おはよう」

声の主は、クラスメイトの富岡静だった。

「ああ、トミオカさん、おはよう」

「寒いね」

「今朝なんかね、あまりにも寒くてなかなか布団からでないでいると、お母さんが、”こら、シズカ、遅刻するわよ!!” って……」

そこまで言って、静はハツとした。

話を聞いていたナオキも、ハツとなった。

彼らはあることを思い出した。

遅刻しそうだということを。

「「ヤバ」」

2人同時に言うと、走り出した。

現在朝の8時39分。学校までは歩いて7分ほどだから、8時45分のホームルームには、走れば間に合うかも知れない。

勢いよく走り出した2人だが、曲がり角に差し掛かったところで、静が霜柱に足を滑らせ転んだ。

「いたゝい」

ナオキは立ち止まると、

「トミオカさん、大丈夫？」

と問い掛けた。

「うん、大丈夫だから、キクチくん、先に行って」

ナオキの心の中で葛藤が始まった。

”遅刻したくない、だけどトミオカさんをほっというて先になんて行けない……だけど皆勤賞が……”。

ナオキが出した答えは、

「トミオカさん、立てる？」

「う……うん」

静がなんとか立つと、ナオキが静に背を向け、かがんだ。

「おぶって行くから！ 早く！！」

「え、でも……」

「早く！！！！」

「は、はい」

ナオキが静を背負って立ち上がった瞬間、少しよろめいた。

「ごめんね、重いでしょ」

静が申し訳無さそうにそう言った。

「ぜんぜん。じっとしててね」

それだけ答えると、ナオキは走り出した。

学校に着くと、

「もう、大丈夫だから」

静がナオキに下ろしてもらおうよう頼んだ。

ナオキは素早く静を下ろすと、

「あとはゆっくり行っても大丈夫そうだよ」

静はその言葉に安心したようだった。

ナオキと静が3階の教室に向かうべく歩いていると、

『キンコンカンコン』

無情のチャイムが鳴った。

担任の渡辺先生はホームルームを時間ちょうどに始めるから、2人の遅刻は決定だろう。

2人が教室にたどり着き、ナオキがドアを開けると、渡辺先生が「おう、キクチとトミオカ、2人揃って遅刻だな」

と、言った。

教室のやつらは、”2人揃って”というところに反応したらしく、教室のあちこちから、冷やかしの声がとんできた。

放課後になり、部活に入っていないナオキが帰り支度をしていると、そこに静がやって来た。

「キクチくん、今朝はありがとう。そしてごめんね、あたしが転ばなかったら、キクチくんも遅刻しなかったのに……」

「いやいや、あそこでトミオカさんを助けたのはボクの判断だから、トミオカさんは気にしないで。それに、昇降口で”もう間に合う”なんて言って、ごめん。間に合わなかった」

「ううん、どっちにしろ、あたし足が痛くて急げなかった……」

静が伏せ目がちにそこまで言うのと、ナオキが、

「ねえ、足は大丈夫？　もしよければ送っていくけど、どうかな」
ナオキはうつむいて言った。

静の視線から、ナオキの横髪の間からわずかに見える彼の頬は、紅くなっている。

「いいの？　お願いしようかしら。話したいこともあるし」

静も少し照れながら言った。

ナオキは、”話したいこと”の内容が気になって仕方がなかった。

校門の外に出ると、静が

「ちよっとどこかでお茶しない？」

と訊いた。

ナオキが賛成すると、2人は近くの喫茶店に向かった。

喫茶店のオーブンテラスに向かい合って座ると、ナオキがウェイトレスを呼び、飲み物を注文した。

「ボクはホットコーヒーを。ブラックで」

ウェイトレスが静の注文を促すと、

「あ、あたしもそれで」

そう答えた。

”どうしよう、ブラックなんて飲めないよ。”

静がそんなことを考えていると、

「え……と、トミオカさん、話したいことってなに？」

ナオキが訊いてきた。

「ごめんなさいっ」

「え？」

「あたし、ほんととは足の怪我なんてしてなかったの。けどあの時、急にキクチくんに甘えてみたくなって……」

恥じらいをたっぷり込めて、静が言った。

言ったあと、顔が紅くなっていくのが、自分でもわかった。

ナオキは戸惑った。どう解釈していいかわからなかった。しかし、ナオキは口を開いて言った。

「じゃあ、ボクからも話があるんだ。ボクはね、さっきみたいに恥じらってるトミオカさん、可愛いからすごく好きだよ。そして、できればもっというんな表情をボクに見せてほしい。」

今度は静が戸惑った。いつのまにかうつむいている。

しかしナオキはそんな静をよそに続けた。

「トミオカさん、もしよければ、ボクと付き合ってほしい。初めて見たときからあなたのことが好きだった」

静は、すぐにはなにも言えなかった。

「そうだよ、いきなりこんなこと言われても困るよね……。じっくり考えて返事をちょうだい」

「………いいよ」

「え？」

「あたし、キクチくんとなら、付き合ってもいいよ」

静がゆっくり顔を上げた。

「あたしも、ずっとキクチくんのこと、好きだった。初めてあった時から……」

「ほんとに、いいの？」

「キクチくんこそ、あたしでいいの？」

「もちろん！ ボクはね、トミオカさんじゃなきゃ、やなんだ」

いつの間にか傍らにいたウェイトレスが、トレイにコーヒーカー

プを2つ載せて、微笑んでいた。

それに気づいたナオキが、咳払いをひとつして、

「ありがとうございます」

と言った。

ウエイトレスはカップを2つテーブルに置くと、足早に戻って行った。

「じゃ、熱い内に頂こうか」

「うん」

静はブラックを無理して飲んだ。

ホットで注文したコーヒーは、すでにぬるくなっていた。

2人は顔を見合せ、しばらく笑いあっていた。

店をでると、静が話をきりだした。

「ねえ、あたしたち付き合うんなら、名字で呼びあうの、やめよ」

「いいよ、シズカ」

ナオキは、言いながらも照れ臭かった。

「ナオキ」

「なに？」

「呼んだだけ」

「やめろよ」

「ナオキ」

「なんだよ」

「呼んだだけ」

「やめろったら」

「ナオキ」

「怒るぞ」

「手えつなご」

言いながら、静は左手を差し出してきた。

ナオキはなにも言わず、右手で繋ぐ。静の鼓動が、ナオキに伝わる。

ナオキの呼吸が、静に伝わる。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

この作品は、”すとむみずみ”らしさがよく出ているとおもっています。

大変気に入っております。

ちなみに実話をもとにしています（誰のとは言いませんが）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8591q/>

呼吸

2011年4月2日14時55分発行